

## [63] 私はブゼンとしている 慣用語の話 (7)

前回のおしまいに辞典の記述方法についての不満と希望とを記した。もとより私は、言語の使用の実態をあるがままに「かくのごとし」と伝える辞書があってはならないと主張しているのではない。実態がどのようなかを正確に把握したうえで、もう一步踏み込んで「かくあるべし」の判断を下した辞典があつていいと希望しているのである。

とはいうものの、やたらに「規範」を押しつけるのも押しつけられるのも、私は好まない。ただ、従うにしろ従わないにしろ、「規範」とされているものが何であるかは、予めわきまえておきたいのである。

先の文化庁の発表によると、「檄を飛ばす」に次いで誤用の多かったのは、「慥然（ぶぜん）として立ち去った」の「慥然」だそうだ。「失望してぼんやりとしている様子」と正しく答えた人が 17.1%であるのに対し、本来の使い方からはずれた「腹を立てている様子」を選んだ人が 70.8%にのぼったという報告を聞いて、私はブゼンとしている。「憤然として席を立つ」の「憤然」と混同したのであるうか。「然」の字は「猛然」「公然」「毅然」「冷然」「超然」……と、数多くの状態を表す語をつくるが、この字が付く形容語の一つ一つの意味を必ずしも明確に意識せずに、それこそ「漠然」と単なる形容語として使われる傾向が強いから、上のように互いに似た文脈で使われた場合、勢い混同が生じるのであろう。

今のところ「慥然」の本来の用法からのズレに言及した辞書類は、私の知るかぎりではないようだが、今後どのように扱われるかは興味深い。「慥」は「失意のさま」「驚くさま」「怪しむさま」を表すから、「慥然」を「腹を立てている様子」を表すのに用いるのは誤用という、「毅然」とした扱いを期待したい。

「話のさわりだけを聞かせる」の「さわり」も本来の使い方「話などの要点のこと」の 35.1%に対し、思い込みによる誤用の「話などの最初の部分のこと」が 55.0%と大きく上回っている。

この「さわり」は、もと義太夫で他の節づけを取り入れた箇所、そこから転じて「一曲中で眼目とする所」、さらに転じて「話の聞かせ所」として使われるようになったことは多くの辞書が記述するとおりであるが、この語についても、現在のところは今回の調査に見られたような使い方は取り上げていない。

取り上げるとしたら、「さらにもう一度転じて」とでもするのだろうか。ただ、上の「一曲中の眼目」から「話の聞かせ所」までの変化は、ことばの変遷の過程として無理なく自然に受け入れることができるが、今回のような「要点」から「最初の部分」への変化は、無理な飛躍がありすぎて、受け入れるのに抵抗を感じる。

ことばの使い方が時代とともに変化していくものであることは認めるにしても、なにもかも流れに任せっぱなしというのでは、いささかさびしい。

2008/9/26